

光の暗黒面

——『ウルトラマンティガ』(1996-97)と情報社会——

小林 徹

外国文化研究室

The Dark Side of Light :

Ultraman Tiga (1996-97) and an Information-Oriented Society

Toru KOBAYASHI

World Civilizations

Abstract

Put *Ultraman Tiga* (1996-97) on the actual scene of Japanese society in the years from 1995 to 1997. It was the memorable period in which some very significant incidents occurred, for example, a major earthquake in the Hanshin area, the fatal gas attack against the metropolis subway system and a junior high school student's killing of the young boy in Kobe. Japan was at that time of the horror entertainment boom with a best-selling novel named *Parasite Eve* at its peak. *Ultraman Tiga* is a fictional television program for children featuring a supernatural hero whose mission is to protect the earth against monsters or aliens from outer space. It might be easy to find those above-mentioned incidents reflected in the program but there is more to be argued about the historical significance the work has in terms of the information-oriented society. Analysis of the interactions between its main plot and these reflections shows that *Ultraman Tiga* had already depicted the fearful digital environment of today where individuals are unwittingly governed by a single computer system on the basis of their own personal information.

I

年表を取り出し、1995年から97年にかけての頁を開く。日本のいまの状況について考えようとする時、避けて通れない重要な出来事がある頃、しかも集中して起きていたことがわかる。戦後50年が謳われ、さてこれからという雰囲気にも水をさすかのように、1995年は、後々の社会にも暗い影を落とす出来事から始まった。阪神・淡路大震災である。日本の安全神話はこの一撃で崩壊し、日本はセキュリティの面で文字通り根本からの見直しを迫られた。そして二箇月後、さらに社会の弱点を突くかのような深刻な出来事が生じた。地下鉄サリン事件である。前代未聞の手法と被害の甚大さもさることながら、今度は日本人の心という側面が表に引きずり出され、そして人々はその部位に直面させられた。そのような衝撃力をもつ出来事は翌年には見当たらないが、明けて97年には再度噴き出す。神戸連続児童殺傷事件である。犯人が中学生であるとわかった時の驚愕は大きかった。続いて行われた原因探しでは、社会や家族ばかりでなく、人の無意識にまで光が当てられたが、むろん解答もまた有効な対応策も見出されず、ただ漠たる不安が醸し出されただけ、ある種の諦念にも似た心境が残っただけであった。

次にそうした社会やそこに生きる人々の核心部にふれる場面から離れ、大衆文化へと目を向けると、興味深い現象を見付けることができる。1995年、瀬名秀明著、『パラサイト・イヴ』のベストセラーである。この作品によりホラーは、一部の好事家の所有物ではなくなり、いわば市民権を得たといわれているが、その真偽はともかく、この出来事は少なくとも、その当時多くの人々が好んで恐怖を求めたということは証している。確かにそれ以前より日本ではいわゆるホラーブームは起きていた。1993年、角川書店が、角川ホラー文庫の立ち上げと同時に、日本ホラー大賞を創設し、このジャンルの普及および新人の発掘が積極的に進められ、そしてその第二回の大賞受賞作品が『パラサイト・イヴ』だったのだ。¹

そしてウルトラマンである。生真面目な年表には記されていないだろうが、この時代、彼にあって注目すべき出来事が生じていた。ウルトラマンは既にひとつの様式として日本に根付いているといえる。1966年、ブラウン管のなかの地球に初めて降り立って以来、変身、怪獣や宇宙人との決闘、限られた活動時間といった基本的な設定はそのままに、様々に変奏されながら、今日でもその雄姿が人々のまぶたに焼き付いているというわけだ。伝統と呼びうるその歴史にはしかし、長い欠落期もあり、それは実写版テレビシリーズとしては第七作目にあたる『ウルトラマン80』（1980）の終了後に訪れた。そして1996年、ウルトラマンは、新たにティガという名で、再びテレビの世界に光とともに現れたのである。そこで本稿で論じたいのは、『ウルトラマンティガ』が上にみたような時代の様相を反映しているとか、そうした時代だったからこそ彼は復活した、ということではない。放映時の社会的状況に支えられている、あるいはそれを確実に背負っていることが認められる時に『ティガ』が表すだろう、社会に関わるもうひとつの顔貌に注目したいのだ。結論から述べよう。それは情報化という動向である。『ティガ』を今日取り上げる価値があるとすれば、おそらくこの点においてだろうと

思う。その潜在能力の高さや多様性を想像すれば容易に合点がいくように、そもそも情報化とは、シリアスな出来事とエンタテインメント系の出来事をいわばつなぐ出来事となるのに十分な資格を有している。言い換えれば、情報化とは社会の諸々のながれの合流点となる現象であり、そこでそれについて『ティガ』は何を語っていたのか、こうした構えで『ティガ』を読み直してみる。すると、『パラサイト・イヴ』の場合に模した言い方をすれば、この作品は単なる幼児向け番組に終わっていなかった、そうしたうわべ、つまりメイン・プロットの層をはがしてみると、訴えかけられている相手は必ずしも彼らだけではなかったことがみえてくるのである。

II

時は西暦2007年。ウルトラマンティガは、「原因不明の怪現象や自然災害から地球人類を守る」TPC地球平和連合の一組織である「超常現象を専門に調査する七人のエキスパートから成る特殊編成チーム」(第1話)、GUTSの隊員、ダイゴが、スパークレンスを用いて変身する光の巨人である。彼は超能力を駆使して怪獣や宇宙からの侵略者と戦う。1996年9月7日から97年8月30日まで放映された『ウルトラマンティガ』は、こうした彼の活躍をほぼ一話完結で描く、全52話から成る作品である。いってみればこれが先に述べたメイン・プロットの梗概であり、毎回約束通りにことが始まり、終わっていく。怪獣の突然の出現、そしてウルトラマンによる駆除である。ところが一話一話丁寧に観ると、そうした幼児向け番組特有の形式を踏襲しているにせよ、そこには観る者を恐れさせる機会が多々あることがわかる。先にこの作品が登場した際の背後にはホラーのながれがあったことを指摘したが、『ティガ』は予想以上にそうした恐ろしい文脈に根差しているのだ。

普通ホラーとは、人に恐怖という感情を惹起することを主な目的とする娯楽フィクションを指し、それは現在小説、映画、テレビ番組等、様々な形態で展開されている。そして人は何に対して恐れるのかと問われれば、それは、米国のホラー作家 Howard Phillips Lovecraft にならって、「未知のもの、あるいは奇怪なもの」(312) とひとまずいっておいてよいだろう。また物語としては、日常の場への常識を超える非日常的なものの闖入というパターンが一般的である。² そしてこうしたホラーは実は、ウルトラマンとは元々縁浅からぬ関係にあったのだ。その歴史を繙くと、果たしてウルトラシリーズの制作会社円谷プロはいわゆるホラー物も得意としていたのである。かいつまんでいうと、まず、そのシリーズの最初の二作の後、円谷が同じ放送時間枠用にと制作したのは、『怪奇大作戦』(1968-69) という表題だけですぐそれとわかるホラー番組であった。その後は、1973年の『恐怖劇場アンバランス』をはじめ、怪談物も含む多数の単発作品が制作されていき、やがて1989年には親元から独立するかたちで円谷映像が設立され、そこは、『エコエコアザラク』の映画化(1995, 1996, 1997, 2001) や『ねらわれた学園』(1997)、『蛇女』(2000) で知られるように、独自のホラー作品を世に送り出し続けている制作会社なのである。³

そして繰り返すが、『ティガ』にとりホラーは単なる背景以上のものだったのである。そこには多様

なホラーの要素がちりばめられている。第5話「怪獣が出て来た日」に登場するシーリザーは「ゾンビ怪獣」と形容され、第8話「ハロウィンの夜に」では、ホラーにおける重要なトポスである不気味な家が舞台となり、またティガが魔女の姿形から変身したギランボと一戦を交えた場所は墓地であった。それから第13話「人間採集」ではレイブーク星人による人間狩りが、第15話「幻の疾走」では靈魂の活躍が、第16話「よみがえる鬼神」では怨恨による化物の復活劇が描かれ、第21話「出番だデバン！」では、魔神エノメナが発する電磁波は人間の脳のなかに「一種の恐怖ホルモン」を作り出し、そのため人々は攻撃衝動、殺人衝動に駆られる。また第22話「霧が来る」にあつては、宇宙からの寄生体により村中の人々がゾンビ化する。⁴ さらに第23話「恐竜たちの星」、第27話「オビコを見た!」、第31話「襲われた GUTS 基地」ではそれぞれ、鱗状の皮膚をもつ恐竜人類なる者が、大昔から闇のなかに住んでいたとされる妖怪が、遺伝子操作により凶暴化した生命体が跋扈し、加えて第33話「吸血都市」は、舞台から登場人物の造形、小道具まで、ずばり吸血鬼の話であり、第47話「闇にさようなら」はいまでいうバイオ・ホラーである。なお蛇足ながら、第35話「眠りの乙女」では、宇宙人に乗り移られた女性登場人物には明らかにホラーメイクが施されているといった具合である。⁵ ところが『ティガ』が本当に怖いのは、多くのエピソードがそうしたホラーテイストを帯びている以上の理由による。そしてそれは作品をエピソード単位で捉える限りみえてこない。観る者が震えるのは、『ティガ』全体をひとつの物語とみなす時である。そしてそこには『ティガ』を『ティガ』たらしめている、ある重要な設定が密接に関わっている。

III

『ティガ』にはその独自性へとつながる決定的な設定がある。それは、ダイゴは普通の人間でしかないという点である。初代ウルトラマンやウルトラセブンをはじめ、歴代のヒーローが元々宇宙人であったことを想起すれば、これだけでも『ティガ』は他のシリーズから明瞭に差異化される。⁶ ところがこの人間ウルトラマンという設定が注目し値するのはそのためだけではない。それにより劇中他の人間たちはウルトラマンとある種共通の土台に置かれることになる、つまりダイゴ、あるいはウルトラマンが難題に直面した時、人々は原理的には自分たちもまたその当事者になりうるという含みを物語がもつことになるのだ。そしてさらに留意すべきことに、ダイゴが人間である以上、その図式の延長線上にあつては視聴者も当然含まれていく。こうしてダイゴ、劇中の人々、われわれという回路が成立する。要するに『ティガ』が独自に備える設定は、その世界で生じている諸現象や諸問題にわれわれ自身が直接向き合うことを導く装置なのだ。⁷

ウルトラシリーズはこれまで、度々社会的意味をそこに読まれてきた。たとえば、広義のイデオロギー、ナショナリズム、民族、科学やテクノロジーと倫理の関係、正義、それから差別といった問題が、作品を底流で支えるテーマとして盛り込まれていると論じられてきたのだ。⁸ しかし、種々のエピソードの単なる寄せ集めではなく、一個の物語として見直すと、『ティガ』がより力強く提起していた

のは、社会全般というよりも、そこに住まう個人個人に焦点が当てられる問題だったと考えられる。というのも明らかに、全体のながれとして、まずダイゴが試される立場に置かれる段階があり、ついで、先に示した回路を通じて、彼に突き付けられた問いが今度は劇中の他の人々に対して問われることになるからだ。そして繰り返すが、その先には確実にわれわれ一人一人がおり、こうした構図において『ティガ』は情報化と切り結ぶのである。

『ティガ』の前半部はダイゴの意識の有様を軸に展開する。何の前触れもなく自分にはウルトラマンへの変身能力があることを発見したのだから、当然彼の心理は戸惑いから始まる。第2話「石の神話」においてそれが明確に表されている。以下は、彼とユザレ⁹の対話である。

ユザレ。 巨人を蘇らせる方法はただひとつ。ダイゴが光となることです。ダイゴ、またの名をウルトラマンティガ。

ダイゴ。 君はホログラムじゃないのか。

ユザレ。 これはホログラム。でも人工知能が組み込まれてある。

ダイゴ。 なんておれだけに君の声が聞こえるんだ。

ユザレ。 あなたはウルトラマンティガだから。

ダイゴ。 違う、おれはおれだ、ウルトラマンティガなんかじゃない。

ユザレ。 ダイゴのDNAには古代の英雄戦士の情報がプログラミングされている。

ダイゴ。 なんだそれは。

ユザレ。 ダイゴのもつスパークレンスこそ、ダイゴがウルトラマンティガという英雄の証し。

ダイゴ。 こんなもの。(ダイゴはスパークレンスを床に投げ捨てる)だいたい君たちはあんなに高度な文明を築き上げながら、一体どこへ行ったんだ。

ユザレ。 ある者は滅び、ある者は他の土地へ向かった。

ダイゴ。 あんなにたくさんの巨人がいたのに、君たちを守ることはできなかったのか。

ユザレ。 ウルトラマンは人類の選択には干渉しない。なぜなら彼らは光だから。でもダイゴは別。あなたは光であり、人である。

少し前にウルトラマンの姿で超古代怪獣ゴルザ、メルバと戦ったという事実それ自体(第1話)は理解できようものの、彼は心情的には自身の特異性を受け容れられないでいる。しかもダイゴには矢継ぎ早に、この彼自身の出自にまつわる不可解さに加え、いわばウルトラマンのアイデンティティの問題も被さってくる。

続く第3話「悪魔の予言」が描くのは、ウルトラマンの社会的認知をめぐる問いである。人々の前に出現して間もないティガは、依然というより当然、人間社会での位置付けが定まっていない。GUTSの隊長イルマだけが「私たちを守ってくれる存在」と直感しているだけである。そこでこの状況に先

手を打つべく、以前より地球に潜んでいた精神生命体、キリエルビトは直接ティガにこう挑戦する。

キリエルビト。 君を待っていたのだよ、ウルトラマンティガ。君はこの星の守護神になるつもりかね。おこがましいとは思わないか。君がその巨大な姿を現すずっと前から、この星の愚かな生きものたちはキリエルビトの導きを待っていたのだよ。君は招かれざる者なのだ。

確かにその超能力をもってすれば、「守護神」たることは可能であろう。しかし現状ではまだその存在自体社会に受容されるには至っていない。まして人間であることに激しい揺さぶりをかけられた直後のダイゴには、その元々の属性に固執すればするほど、「守護神」という像には違和感を覚える、いや嫌悪すら抱くかもしれない。こうしてダイゴは、この後しばらく、相互に関連する、変身前後の自分各々に帰属する問題を抱えたまま、異変に立ち向かわざるをえない。

シリーズ中盤、第19、20話「GUTS よ宙へ（前後編）」は、強大な科学の力を手に入れた人間の振舞というウルトラシリーズの伝統的テーマを扱うものであるが、同時にダイゴの意識の物語における重要な転回点を語る、その意味で注目すべきエピソードである。新造母艦アートデッセイ号で宇宙に乗り出すGUTSの前に「正体不明の謎の機械人形」（第20話）、ゴブニュが立ちほだかり、これにはティガも一敗地に塗れる。気を失っているダイゴの心中で、これまでの戦いの場面が次々と現れては消え、その後ユザレの声が響いてくる。

ユザレ。 ダイゴは光、光はダイゴ。

ダイゴ。 ぼくが、なんでぼくなんだ。

キリエルビト。 地球の守護者になるつもりかね。おこがましいとは思わないか。あはは
[...]

ダイゴ。 くそー。ぼく一人でこの地球を守れっていうのか。ぼくは負けたんだぞ。ウルトラマンティガになる資格なんて、ぼくにはあるのか。（第20話）

この遣り取りが暴露する事実は重い。その苛立ちが明示するように、当初抱え込んでしまった、自分がウルトラマンであること、および「守護神」であることに関する問題は、依然ダイゴのなかでは決着が付けられていなかった、一度の敗北で瓦解する程度の自己了解しかできていなかったのだ。しかし彼をこうした心理的危機から救う瞬間が訪れる。やがてダイゴには宇宙で応戦する仲間の姿が見え、「ぼくだけじゃないんだ」との認識に至る。そして以下のユザレの言葉が彼を後押しする。

ユザレ。 そう、光になる力はこれまでずっと受け継がれ続けて来た。人類が次の時代に進もうとしているいま、光となる力は再び求められている。けれどあなたは一人では

ない。人間たちが力を合わせなくては次の時代に進むことはできない。私たちの種族が絶えてしまったように。

こうしてダイゴは人間でもありウルトラマンでもある自分を受け容れ、また「守護神」ではなく他の人々とのいわば協同者として立つ決心をするのだ。この後ダイゴには迷いはなくなる。¹⁰ 彼自身に関してはこれで落ち着いた。そして物語では、以降、ダイゴを先行者とする他の人々の意識と行動が注視されていく。

IV

いわゆる怪獣映画では、一般の人々は、圧倒する巨大怪獣から逃げ惑うだけの被害者として描かれるのが普通である。確かに『ティガ』でもそうしたモップ・シーンは珍しくない。しかし作品が全体として提起する問題から考えても、また実際の描かれ方の濃淡からみても、人々がそうした窮地にあって露呈するいわば身体上の弱さは結局、二次的な意義しかもたないことがわかる。以下の対話は第35話「眠りの乙女」からであるが、作品中示される人間たちとは主にこうした意味での脆い存在である。なおここでのGUTS隊員レナは、地球の征服を企むデシモ星系人によりその身体を乗っ取られている。

ダイゴ。 どうして地球を攻撃する。地球の人間と友だちになろうと思わないのか。

レナ。 うふふ。人間なんて邪魔なだけ。この星を腐らせるだけの存在じゃない。前と同じことを繰り返しているだけ。

ダイゴ。 人間はそんなに愚かじゃない。

レナ。 うふふ。やだなあ、人間の味方、どうしてするかなあ。

同様にキリエルビトも以前人間を「愚かなる人間」、「みじめな生きもの」(第25話)と呼んでいたし、第28話「うたかたの…」ではレナさえも「未熟な私たち」と評していた。そして第38話「蜃気楼の怪獣」は、情報操作に踊らされる大衆をめぐるエピソードなのだ。¹¹ 愚かで弱い存在。構造的に彼らは、ゴブニュとの試練に打ち克ち、自らの宿命を受け容れ、その存在理由を再確認したダイゴとは全くの対極にある。¹² そして物語の展開上、ここに先行者ダイゴの意義が生きてくる。要するに『ティガ』の主題は人間の心の弱さであり、言い切ってしまうえば、そこでは個々人のいわば意思する力の問題が提起されているのだ。繰り返されるメイン・プロットの影に隠れて見失われがちだが、その頻度が証明するように、作品が全体として提示するのは人のそうした側面にほかならない。そしてこの問題提起あるいは告発が最も明瞭に行われるのが、第43話「地の鮫」、第44話「影を継ぐもの」であり、またその際初めて『ティガ』は本格的にわれわれに迫る。

マサキ・ケイゴという天才的人物が登場する。やがて彼もダイゴと同じ遺伝情報をもつ、すなわちウルトラマンへの変身能力を有していることが明らかになるが、しかし二人は姿勢において全くの別人である。スパークレンスを奪ったマサキと、彼を追いその隠れ場所に辿り着いたダイゴとのあいだに、このような遣り取りが行われる。

マサキ. ここまでこれたんだね。よーっ。君はぼくと同じ。いっただろう、君だけが特別な存在なんかじゃないって。

ダイゴ. そうだ、ぼくは特別な人間なんかじゃない。けど、ぼくは自分のできることをする。この星と、この星の仲間たちをみんなといっしょに守る。

マサキ. みんな？みんなはウルトラマンのことを神だと思っているんだよ。いいのかい、そんな情けない意識でいてさあ。

ダイゴ. 情けないだって。

マサキ. そうさ。君は光の力に頼っているだけだ。人類の進化を強制的に導くのがウルトラマンの使命さ。

(ダイゴは首を横に振る) (第44話)

二人の対照は明らかだ。ウルトラマンの超能力をめぐる、他愛主義と自己中心主義、協同と独裁、そしてその背後にある他者に対する尊重と軽蔑。結局ダイゴとマサキは、正しい心の持主と悪しきあるいは弱い心の持主、またはもっと踏み込み、一人の心のなかにある光と闇を表すのだ。¹³ このエピソードは、禁欲的にも個人の事柄に集中しているところに重要性がある。問い自体は単純なものである。どちらの態度が好ましいかはすぐわかる。しかし、かといって、揺るがぬ信念をもって容易くダイゴを選ぶことが果たして現実にできるだろうか。近年の状況をしばし振り返るだけでいい。準拠となるものが日々変転し、従ってその枠組みの存在すら虚構となりはて、結局全てが個人の意思決定に基づく采配に投げ返され続ける、ある一定の豊かさを背景に権利と自由と平等の意義が完全に咀嚼されぬまま浸透したことの裏返し。イーヴィルティガに変身したマサキは、人々に向かって、「私は進化した人類だ。愚かしい旧人類は私に導かれることだけが生き残れる道だ」(第44話)と叫ぶが、その不遜さに何人の人間が心から罵声を浴びせられよう、また逆に何人の人間がその言葉のもつ魅惑に抗えよう、もっといおう、どれほど多くの人間が自身の欲望にのみ基づき行動を起こすか、と。そしてもし日毎の不可解な事件や出来事の報道にいまでもそうした感覚を少しでも覚えるようなら、われわれは依然、あの時代と同じ、いわば物事の個人への還元が加速した環境に居続けているといえるのだ。想起されるのは、ほかでもない、ここ十年あまりの情報化の動向である。なぜならそれは個人の焦点化というプロセスをこそ内実とするものであったと考えられるからである。まず『ティガ』放映開始の前年に、情報関連分野において大きな展開があった。1995年という年は、『ウィンドウス95』それから簡易型携帯電話PHSが登場した年であり、端的なところでそれらが裏打ちしているように、情報化は一般の

人々に対してパーソナルであることを保証するという傾向を明確に打ち出していたのである。詳しく述べる必要もないだろう、そのOSがパソコンの普及を強力に推進し、携帯可能な通信機器は、個人にしか依拠しない独特のコミュニケーション形態を開発した。そして翌年、『ティガ』の年には、インターネットが一般化する。これにより人々、いや個々人が、自由に多量の情報を収集、交換できるようになり、しかもより重要なことに、情報の発信者となる機会を確実に手にしたのだ。一方これに連動して、あふれる情報のなかでの的確な選択能力の必要性が指摘され、また、ひとつに匿名性に起因するところの、情報発信の際の諸責任のありようや倫理が話題となり、さらにはIDとパスワードによる個人の新しい認証方式の登場への違和感が吐露されるなど、情報ユーザー個人に帰着する能力や態度、そして諸条件が問われ出したのである。要するに、重要なのは結局一人一人の行動であり、良きにつけ悪きにつけ、諸々の事柄は自己責任として行為者各々に跳ね返ってくる、こうした有様を間違いなく1995年に始まった情報化は促していたのだ。そして今日の状況はといえば、それは明らかにそうした方向の一帰結と理解することができる。普及率60パーセント以上というパソコンの一般家庭、さらには個人への浸透は言うに及ばず、ユビキタス・コンピューティングというイメージのなかでの、PAN (Personal Area Network)、あるいはホームサーバーの実現可能性の高さからもうかがえるように、いまや逆に個人がコンピュータにより文字通り囲まれているという暮らしがかまびすしく提案されているのであるし、PHSに代わって、飛躍的に増強された機能を備える携帯電話が大多数の人々の手中にあるのが現在である。とりわけそのモバイル機器は、日本における情報化の最先端と今後の可能性を物語るものとして注目されている。¹⁴ そこで留意すべきなのは、このように現代の情報をめぐる事情はそうした1996年前後に顕著となった動向の延長線上にあり、かつそれは個々人の行動に反映されている社会全体の動きと呼応しているという点である。そして依然『ティガ』がその価値を今日までもち続けているのは、そうしたいわば個人化への方向性を宿す環境それ自体ばかりでなく、表に出にくいその実態をわれわれにまざまざと見せ付けるからである。この作品の真の恐怖はそこにある。

簡単にいうと『ティガ』の物語の結末は、古代に人類が滅びたように、現代の人類にも同じ運命が待っているという事態をめぐる展開する。「永遠の命」と題された第45話は、この最終エピソードの序章的役割を果たしている。地球各地に見たこともない花が出現するが、そこから撒き散らされる花粉は、人々に苦しみや悲しみを忘れさせ、お花畑で戯れたり、肉体美の追求に勤しむなど、それぞれの抱く願望にあわせた快樂の世界に彼らを浸らせる効果をもつ。その花、ギジェラの由来を知る超古代人の生き残りヌークとテラによると、それが現れたのは、人類がそうした心地良さに各々包まれたまま、苦しまずに滅びるためだった。そしてこの独自の快樂に耽り続けることをのみ求める人々が住まう環境こそ、戯画化されているとはいえ、上述した個人化の進展が突き詰められたかたちの社会と考えられるのだ。一人そうした唯我の状態から脱しているダイゴと、既に花粉の虜となり戦意を喪失しかかっている他のGUTS隊員との以下の遣り取りにそのことが如実に表されていよう。

レナ。 ギジェラは地球からの贈り物なのかもしれない。

ダイゴ。 そんなものはいらぬ。みんなで地球にいればいい、おれたちは苦しむぞ、苦しんでギジェラよりもっと素晴らしい夢を実現させるんだって。

イルマ。 でももし人間がギジェラの方を選んでしまったら？

ホリイ。 ダイゴ、人類がほんまに滅亡の危機に瀕するとして、全ての人間を救えるか？
死んでいく人間には苦痛よりギジェラが大事やぞ。

ダイゴ。 みんないつからそんな意気地なしになったんですか。人間はそんなに弱いんですか。

ダイゴは協同のみが人類を救うと信じるため、滅びの運命を甘受する寸前にある人々に激しく抗するが、聞き入れられない。彼ら弱い心の持主たちのあいだでは善も悪も揺れている、正邪も判別されかねている、というより、そうした倫理的観念など、現に享受されている各々の快樂の前では、埒外に追い遣られようとしているのだ。マサキ・ケイゴの独善性はこうして蔓延している。不可思議な花粉という原因こそ異なるものの、人々は快樂に溺れる、とはつまり己の欲望の満足しか眼中にないのだ。「おれは何を信じればいいんだ」、ダイゴは一人悩む。周りでは、それぞれの喜びを約束するギジェラの花粉を手に入れようと争う人々にあふれている。しかし彼は、「ダイゴ、おまえの正しいと思ったことをやれ」と自らに言い聞かせ、ギジェラを焼き払うべくティガに変身する。多くの人間を敵にまわすだろうことは覚悟のうえでダイゴのようになれるか、自らの意思でそれぞれの欲望を捨てることができるか、ギジェラのエピソードはそう問いかける。『ティガ』の最終エピソードは、ボス的な怪獣との決戦というよりも、この問い自体が主題となっている。そしてそのなかでわれわれはどう描かれているのか、この観点から最終三部作は見直されねばならない。

プロットをまず追っておこう。第50話「もっと高く—Take Me Higher—」では、突如ニュージーランド沖の海底が隆起し、三千万年前の超古代の都市の遺跡が現れる。そこから飛び立った超古代先兵怪獣ゾイガー、「地を焼きはらう悪しき翼、大いなる闇がこの地を暗黒に塗りこめるその使い」がオーストラリアを破壊する。ティガはゾイガーを苦戦の末打ち倒すが、その時既にさらに無数のゾイガーが地球各地で破壊に着手していた。続く第51話「暗黒の支配者」では、その遺跡から闇が広がり、ついに「闇の支配者、世界を暗黒に塗りつぶすもの」、邪神ガタノゾーアが姿を現す。しかし今度はティガも敗れ、石像と化し海底に沈む。そして第52話「輝けるものたちへ」では、ティガの復活作戦が開始され、後に蘇ったティガはガタノゾーアを倒し、世界を覆っていた闇は消え去り、人類は次の時代へと進むことができたのだ。あたかも示し合わせたかのような。幸せな結末はさておき、このエピソード自体、とはつまり結局『ティガ』全体の物語ということになるのだが、それはやはりホラー以外のなにものでもない。脚本を担当した小中千昭氏も明言しているように、このエピソードは、先述のラヴクラフトが創り上げたクトゥルー神話を土台にしている。¹⁵ 人々はその邪神により、三千万年前の古代の時と同様、滅ぼされてしまうのではという不安に震えるのであり、これが『ティガ』

に埋め込まれていた根源的なホラーの図式なのだ。しかし主張したいのは、その図式を飛び道具にして、現実にはびこる恐怖の環境を『ティガ』が暴き出していることである。そしてここに至り、これまで注目してきた、人間ウルトラマンと人々とのあいだの回路が最大の重みをもって働くことになる。

まず先行者ダイゴはこうした未曾有の危機にあって、不安は拭えないものの、少なくとも怯みはしない。滅びの様子を夢に見るも、「こんなことは起きない。滅びることが運命だということか？ どうしてこんなものを見せる？ ユザレーっ」(第50話)と激しく反問することができる。それから、先を急ぐと、劇中では彼の意志する力は確実に人々のあいだに浸透していく。まずはGUTS隊員たち。飛び去るゾイガーを追う、ライドメカ、ガッツウィングのなかでの対話である。

レナ。 どうしていわないの？

ダイゴ。 えっ？

レナ。 どうして一人で抱え込んだじゃうの？ どうして一人なの？ ウルトラマンはたった一人で地球を守り続けなくちゃいけない義務でもあるわけ？ そんなのひどいと思わない？

ダイゴ。 レナ。

レナ。 私だって、私だって光になりたいよ。光になってもっと高く。

ダイゴ。 義務とかじゃないよ。おれは人間だから、おれがやれることをやりたいだけだよ。

レナ。 私、いまうしろ見れない。だから、いいよ。

ダイゴ。 (スパークレンズを見つめながら) 光になれるさ、レナだって。(第50話)

その直後、ダイゴはティガに変身し、ウィング機を抱えたままゾイガーに迫る。この場面はウルトラマンの正体が明かされる劇的な瞬間であるのだが、主題の焦点は明らかに人々と彼とがいわば同列の立場で共闘関係に入ろうとしているところにある。いや普通の人間の側からその意志が明確に表されたことが注目されなければならない。ギジェラの時とは対照的な環境がここに生み出されようとしている。地球を、人類を見据え、滅びの運命に対して敢然と立ち向かおうとしているのだ。そして第51話に至ると、そうした動きはさらに進む。ガタノゾーアとの最終決戦を目前にした、ダイゴ、レナ、イルマの遣り取りである。

ダイゴ。 ぼくは一人で行きます。

レナ。 だめ。

イルマ。 [...] 最初にウルトラマンをこの目で見た時、私は神に出会えたと思っていた。人類を正しい方向に導いてくれる存在だと。でも違うのよね。それがだんだんわかってきたの。ウルトラマンは光であり、人なのね。

レナ。 隊長。

イルマ。 だからあなたは勝ち目のない相手に向かっていく義務なんてないのよ、わかってるでしょ。

ダイゴ。 勝ち目がないなんて、わかりませんよ。

イルマ。 そうね、私も運命なんて信じないことにしたの。必ず勝って、人として。

[.....]

イルマ。 いいわね、必ず勝って、ウルトラマンティガ。

「滅びの闇」に覆われGUTS 基地を放棄せざるをえず、よってティガ一人に依存するしかない、こうした極限的な状況を差し引いたうえでだが、出撃するダイゴを押し留めようとするイルマの語気の強さが目を引く。光の戦士に意見するほどにまで隊員の意識は向上しているのだ。そして同時に、運命への抵抗力が増していることも明らかに見て取れる。もはや個人の欲望云々の話ではない。こうして言葉の純粋な意味での共闘が可能になる。ダイゴが去った後、予想できる苦難を前にして、イルマはレナに、「力を信じるの。ティガの力だけじゃなく、私たち自身の力を信じるのよ」と諭すことができるのだ。

そして物語では、こうした姿勢がティガの復活作戦へと向かわせる。¹⁶ しかしそれは失敗し、ついで劇的な展開が訪れるのだが、それは同時に先行者ダイゴの役割が最終局面を迎える時でもある。すなわち意志する力の問題が、特殊チームの枠を越えて、普通の人々に対して問われるのだ。ティガは蘇るには至らなかった。ところが、ティガへの希望をもち続けた世界中の無数の子供たちが光に包まれたかと思うと、光の粒子となって次々にティガに流入していく。そしてウルトラマンは、まばゆい光を発しながら、グリッターティガとして復活したのだ。続くガタノゾーアへの攻撃のさまは、文字通りの共闘を表すもの以外のなにものでもない。光のなか邪神に対峙している子供たちが足を蹴り出すと、ティガがキックを炸裂させる。彼らの動きがウルトラマンの動きと同調しているのだ。その映像に、「ぼくがティガだ。私がティガよ」、「ぼくがティガになっている」、それからレナの声で、「私もティガのなかに」(第52話)という台詞が被さる。そうしてティガは邪神に勝つことができた。いやこの主語は間違っている。決戦が終わった静かな海上で、ダイゴはレナに、「人間はみんな自分自身の力で光になれるんだ。レナもなれただろう」(第52話)と語る。それは人間たち皆の勝利だったのだ。しかしここで重大な事実気付かれねばならない。『ティガ』が全編を通じて描き切ったのは、自身を見舞った難題を挫折の後に乗り越えたダイゴと、彼に続いて、GUTS 隊員、次に子供たちのそれぞれが己の意志の力を発揮していくさまであった。そこには幼児向け番組という性格もむろん読み取れるが、そのメイン・プロットがくっきりと逆照射するものにこそ注目する必要がある。すなわち一般の大人たちである。このエピソードでは、恐怖に駆られ、無力感、絶望感に苛まれている大人たちが容赦なく描かれ続けてきた。ゾイガーの来襲にあって避難所へと我先に逃げ込む彼ら。廃墟と化したメトロポリスを見るにつけ、怒りを辺りに撒き散らす、それは鬱憤晴らしとしかみえない。そしてティガの

敗北にあって頂点に達する落胆に裏打ちされた、どんよりとした疲れの表情。時折挿入される子供たちの強靱な顔貌とは雲泥の差だ。『ティガ』が例の回路を通じてわれわれに強く注意を喚起するのはここである。まず再確認するのは、ギジェラがもたらす快樂の段階が終わり、次にそうした退嬰的な局面が訪れたという進み行きである。そこで先に指摘した個人化の進展という情報化の動きは、われわれの感受性が麻痺していなければ、正しくこうした経緯を構造化しているように思われるのだ。ここ十年来の情報化はそもそも二面性を有していたと考えられる。先述のように、個であることを保証する装置や仕組みが開発、利用され、そうして人々が自己表現、自己実現の機会を享受していく一方、そのように個人化した人をいわば撻めようとする向きもあったのだ。ここで注意しなければならないのは、その場合、人々は群れとしてではなく、個人個人独自の存在と捉えられたうえでということだ。これは今日にあっていよいよ進行しているといえる。確かに以前より、ネットワーク社会において個人のプライバシーがどれだけ守られるかという懸念があった。そして端的なところで、昨今の住基ネットにまつわる問題である。そのシステムはすなわち、個人情報に依って、全国民の一人一人を一元的に管理する仕組みである。ところが、住所、氏名、生年月日、性別、住民票コードの五種類の項目で開始するも、早晚、学歴や諸資格、病歴等の情報も累積され、結果として国家のもとに、全国民にわたる内容豊富な個人情報のデータベースができあがるというのだ(櫻井)。またビジネスの分野でもそうした動向はみとめられる。一例をあげれば、B to C (Business to Consumer) というマーケティングの手法である。従来企業は大衆というマスを相手にしてきたのだが、いまや個人単位で取引を行おうとしている。個人の趣向に合致した情報を適宜配信するという広告の手法に端的に示されているように、消費者一人一人に対してカスタマイズされたかたちでの戦略が情報技術を用いて展開されようとしているのだ。それから無線タグ、つまり物を無線技術で識別、管理する新手法が、近い将来での人への多様な利用に向けて検討段階に入ったと聞く(志賀 18-38, 200-11)。これらの事態にあっては、個々人は、まったくもって「情報反応マシン」と化す。近代に生まれた成長、成熟する主体であるところの「私」などとは似ても似つかない存在となる(黒崎 84-86)。またそこまで無自覚にならないとしても、こうした個々人を捕らまえる情報システムにより支えられた社会生活にあって、情報サービスが自分宛てにタイムリーに提供されるなどの点で満足感や信頼感、あるいはいつも見守られているという安心感が得られることもあろうが、しかし、一步下がって気付くはずの、自分は常に監視されている、誰かしらに自分のことが知られている、その手中にある、つまりプライバシーの侵害に発する不気味さや畏怖は決して拭われることはあるまい。要するに、情報技術が人々の個としての側面を強化する半面、同じ技術を用いて個々人がデジタルに一括されていくというのが、情報化の動向であるのだ。換言すれば、情報化とは、畢竟、上層には個人の自由な行動が謳歌される様相をもち、しかしその下層には、不気味さや恐怖、ひいてはそれゆえの無力感に満ち、情報による管理機構がある、そうした構造を有しているといえる。そしてガタノゾアのエピソードで映し出されていた大人たちの有様は、この下層部分に照応すると読めるのだ。『ティガ』が恐ろしいのは、以上のような情報化の二層構造を暴き出していたこと、とりわけ下層の部位を前もって表出してみせたところにある。ギジェ

ラの花粉がもたらす個々人が耽る快楽、そして花粉が消えた後の無力感。こうした展開はそのまま、情報化のいわば光と暗黒の両側面を表象していたのである。

V

ところで特に Stephen King によるモダン・ホラーと呼称される小説にいえるのだが、ホラーとは必ずしも人々を恐怖に震えるままにして終えることはない。明るい未来の可能性を結末に用意しておくことも少なくない。ある面、この様式に『ティガ』も則っている。なぜなら最終エピソードで描かれていた、協同への意志を自発的に示した子供たちには十分期待がもてるからだ。そして物語中のそうした展開を現実の場から捉え直すと、明るい未来とは、たとえばNPOが行っているような活動の内に見受けられる類のものであるのかもしれない。これもまた偶然とは思えないのだが、高度情報社会の到来とほぼ同時に、新しいコミュニティの動きが始まった。その大きな契機は1995年1月の大震災であった。その出来事は、先述のように、日本という国の安全性に強い疑心を抱かせたが、その一方で市民のレベルでこれまでにないかたちでの決断、行動が生まれようとしていることも示していた。お上を無視してというのではなく、いわばそれとは別の理念のもとに、人々は各々の問題意識に基づき、独自の手法で行動に出たのだ。そしてこうした市民の自発的な動きの延長線上に、今日のNPO的な活動があるのである。その限りでは『ティガ』は、ダイゴを起点とする回路を通じて、観ているわれわれに意志する力を問い質すだけで終わってはいなかった。加えてそれは、人々の今日あるべきひとつの方向性も示唆していたのであり、その点で『ティガ』をモダン・ホラーの範疇に含めることも不可能ではないだろう。しかし作品をそのように読むことは逆に、それを多分にフィクション寄りへと押し遣ることになるはずだ。すなわち、幼児向け番組の側へということだ。一方、本稿冒頭でも述べたように、情報化とは社会の諸々のながれの合流点の謂であることが今日ますます具現されようとしていることを深く認識すればするほど、『ティガ』は一挙に現実味、真実味を帯びてくる。そこでは、かつてのウルトラシリーズでのような、人類や人間という種、あるいは民族といった抽象ではなく、個々人というきわめて具体的でかつ実在する存在に還元されるどころの、それも現にある問題が焦点化されていたのである。

思い起こすに、ウルトラマンの伝統にはもうひとつ忘れられないコンヴェンションがあった。それは光のモチーフである。当初光は彼の故郷を象徴するものであったが、『ティガ』ではそれに対して大きな改訂が施されていた。夢、希望、熱意、努力、そして正しさといったものを総称する、人間の心の内にあるものとして光は蘇ったのだ。しかしその光が照らしていたのは何であったか。ダイゴが毎回ティガに変身する際に放っていた光、そして最後のガタノゾア戦でグリッターティガがその身体から放っていた、これまでも増して輝いていた光、それらはわれわれ一人一人を照らしていた。結局のところ、広大なデジタルの網の上の結ばれの一点でしかない「私」をだ。そしてこうした「私」をめぐる事態に恐ろしさを感じるなら、その時初めて『ティガ』を第一級のホラーと呼べるのである。

注

- 1 この頃確かにブームと呼べるほど、ホラーは活況を呈していた。文学の部門ではほかに、日本独特の伝統的、土俗的怪異、恐怖を強く醸し出す、「ホラー・ジャパネスク」なるサブ・ジャンルがかたちをなし始めたのが、1993年から94年頃であった。また同時期に、心霊物を中心に映像の分野でも活発な動きがあり、そのながれは『ほんとにあった怖い話』（1991-92）辺りから始まり、1996年の『女優霊』等を経て、1998年の『リング』の大ヒットへとつながっていく。さらにそれと並行して、1990年のアメリカ映画、『羊たちの沈黙』に率いられるかたちで、サイコ物も徐々に広がりを見せていた。この辺りの事情については、東、「ホラー・ジャパネスク」196-204、鷲巣160-72、風間415-29参照。
- 2 以上のホラーの理解は、風間3-9、東、「はじめに」2-4、尾之上3-8、小中98-100、121に負う。また恐怖という感情それ自体に関しては、かつて『ユリイカ』誌上で行われた、ホラーの手練の紡ぎ手たちへのアンケートが興味深い。それによると、ラヴクラフトの指摘する「未知のもの、あるいは奇怪なもの」とは、人を恐れさせるものの核、あるいは逆に単なる枠組みでしかないことがよくわかる。「ホラー作家大アンケート あなたにとって「恐怖」とは？」参照。
- 3 円谷プロ、ならびに円谷映像の諸作品に関しては、中島他に詳しい。
- 4 この第22話はスティーブン・キングの小説にその内容を負っている。
- 5 なお本文で後にふれる第3話「悪魔の予言」、および第25話「悪魔の審判」も広義のホラーである。その二話の脚本を担当した小中千昭氏は、あるインタビューに答えて、「キリエルビトという名前は、悪魔の名前から取ったんですよ」と述べている（切通、『『ウルトラマンティガ』』79）。またこれらのエピソードに関して、小中氏は別のところでさらに、「キリエロイドは、ウルトラでオカルトを堂々とやれたっていう達成感がありましたね」とも述べている（切通、『地球はウルトラマンの星』43）。なお小中氏は『ティガ』のメインライターの一人であり、また主に映像を中心とした現代の代表的なホラー作家である。
- 6 初めてダイゴが変身する場面で、以下のようなナレーションが被されていた。「ガッツウィングが墜落しようとする危機一髪の瞬間、ダイゴ隊員は光となって巨人の体内にあふれた。ダイゴ隊員の生命を得ることで、巨人は長き眠りから目覚めたのである」（第1話）。この人間ウルトラマンという設定は、後に本文で指摘するように、第2話「石の神話」においてより明確に提示される。ちなみに設定では、初代ウルトラマン、ウルトラセブンは、それぞれ宇宙警備隊員、恒点観測員340号とされていた。
- 7 1995年の就任以来、円谷プロダクションの社長を務めてきた円谷一夫氏は、2001年の時点で、「我々は『ティガ』からもいろいろやっていますが、決して子供番組をつくっているという意識はないんですよ。大人番組をつくって、子供にも観てもらいたいという考えでつくっています」と発言している。中島他323参照。
- 8 たとえば、佐藤、切通、『怪獣使いと少年』参照。
- 9 いわば設定編、第1話「光を継ぐもの」においてユザレは初めてその姿を現す。ある日、隕石が地球に飛来する。分析の結果、そこにはタイムカプセルが埋め込まれており、そこから発したホログラムの女性がユザレだった。地球星警備団団長である彼女は、ゴルザの出現を予言するとともに、そうした大異変から地球を守るには、いまは石像となってピラミッドに隠されている巨人を蘇らせるしかないと言っていた。なおその後彼女は、三千万年前に滅んだ人類の一人だったことが判明する。
- 10 その証拠は、ダイゴの救助にきたヤズミ隊員との以下の対話に見出される。

ヤズミ。 ウルトラマンティガが負けちゃったんですよ。

ダイゴ。 ティガだけじゃだめなんだ。ぼくたちが力を合わせなくちゃ。

ヤズミ。 そうですよ。（第20話）

なお本文ではふれていないが、『ティガ』ではウルトラマンが戦う動機、あるいは目的が度々主題化されている。第28話「うたかたの…」が初めてそれを正面から扱い、そこでは、怪獣が現れるのはなぜかという問いかけに導かれるかたちで、ティガは、仲間である人間を、地球を守るために戦うという結論が、歯切れが悪いながらも、示されている。このほか、第38話「蟹気楼の怪獣」、第39話「拜啓ウルトラマン様」、第43話「地の鮫」、第44話「影を継ぐもの」、第45話「永遠の命」などを参照。

- 11 それ以降も作品において「愚かなる人間」は言及され続ける。第41話「宇宙からの友」、第42話「少女が消えた街」、第43話「地の鮫」、第44話「影を継ぐもの」、第45話「永遠の命」、第47話「闇にさようなら」を参照。こうした頻度から、『ティガ』では人間のそうした側面が問題化されているといえるのである。さらに付言すると、第25話「悪魔の審判」以降、この種の指摘は主に侵略者の側からなされることは注目しておいてよい。というのも、そうした反復を通じて、人々の行動の有様が常に検証の俎上へのほすのに加え、さらに重要なことに、ウルトラマンと人々との通底性、ひいては上に述べたウルトラマンの戦う目的といった事柄が問題化され続けることになるからだ。
- 12 厳密を期すなら、第25話「悪魔の審判」において、いわばウルトラマンとの共闘を選択する人々の姿が描かれている。しかしそれに前後するエピソード群においては人々の愚かさ、弱さが示される機会の方が圧倒的に多いため、本論では重視していない。
- 13 劇中ダイゴは、変身しようとするマサキに、「やめるんだ、間違った心で光になったら」（第44話）と呼びかけるが、マサキはそれを制して、「人類などという矮小な存在から、ぼくは進化するのだあ」（第44話）と叫びながら変身していく。なおこのような対立関係は、ウルトラマンティガ対イーヴィルティガといった変身後の名称の上でも引き継がれるなど、劇中繰り返し提示されている。
- 14 以上の情報化の事情については、佐々木1-13, 140-48, 153-89、志賀参照。
- 15 これについては、切通、『地球はウルトラマンの星』44参照。またへい xv-xxxxxv も参照。
- 16 この作戦には、GUTS 隊員を中心に、これまでの主要な登場人物が一同に集まり、文字通り「人としてできること」（第44話）の全てが投入される。またそこにはマサキ・ケイゴも含まれ、彼の改心劇には、人間の意識が良い方向へと変わる可能性が示されている。

引用文献

- 『ウルトラマンティガ』。TBS。毎日放送。1996年9月7日—1997年8月30日。
- 尾之上浩司。「このガイドの趣旨について」。尾之上3-8。
- , 編。『ホラー・ガイドブック』。角川ホラー文庫。東京：角川書店, 2003。
- 風間賢二。『ホラー小説大全』。増補版。角川ホラー文庫。東京：角川書店, 2002。
- 切通理作。『『ウルトラマンティガ』 新たなるウルトラマン神話—脚本家・小中千昭の挑戦—』。『別冊宝島 アニメの見方が変わる本』 第330号。(1997)：78-87。
- 。『怪獣使いと少年—ウルトラマンの作家たち—』。東京：宝島社, 2000。
- 。『地球はウルトラマンの星』。東京：ソニー・マガジンズ, 2000。
- 黒崎政男。『デジタルを哲学する—時代のテンポに翻弄される<私>—』。PHP新書220。東京：PHP研究所, 2002。
- 小中千昭。『ホラー映画の魅力—ファンダメンタル・ホラー宣言—』。岩波アクティブ新書86。東京：岩波書店, 2003。
- 櫻井よしこ, 編著。『あなたの個人情報危険！—プライバシー保護とメディア規制—』。小学館文庫。東京：小学館, 2002。
- 佐々木良一。『インターネットセキュリティ入門』。岩波新書606。東京：岩波書店, 1999。
- 佐藤健志。「ウルトラマンは、なぜ人類を守るのか?—<ウルトラマン>の甘えと矛盾—」。『別冊宝島 映画宝島第2号 怪獣学・入門!』(1992)：40-61。

- 志賀嘉津士. 『[入門] ユビキタス・コンピューティング』. 生活人新書94. 東京：日本放送出版協会, 2004.
- 中島紳介, 片山浩徳, 小原文彦, 編. 『円谷 The Complete—円谷プロ/円谷映像作品集—』. 円谷プロダクション, 円谷映像監修. 東京：角川書店, 2001.
- 東雅夫. 「はじめに」. まえがき. 『ホラーを書く!』. 朝松健他著. 東雅夫とのインタビュー. 小学館文庫. 東京：小学館, 2002. 2-4.
- . 「ホラー・ジャパネスクの時代」. 『ホラー・ジャパネスクを語る』. 岩井志麻子他著. 東雅夫編. 東京：双葉社, 2003. 189-205.
- ジョージ・ヘイ, 編. 『魔道書ネクロノミコン』. コリン・ウィルソン序文. 大瀧啓裕訳. 学研M文庫. 東京：学習研究社, 2000.
- 「ホラー作家大アンケート あなたにとって「恐怖」とは?」. 『怪談 [Kwaidan]』. 『ユリイカ』総特集 第30巻第11号. (1998)：190-211.
- ラヴクラフト, H.P. 「怪奇小説の執筆について」. 『ラヴクラフト全集 4』. 大瀧啓裕訳. 東京：東京創元社, 1985. 311-20.
- 鷲巣義明. 「一時間でわかる日本のホラー映画史」. 尾之上 152-73.